

はたら 働きバチのベルベット

おお き たか ところ す
大きな木のえだの高い所に、ハチの巣が
ありました。ハチたちはみんな、いそがしく
はたら 働いています。す ちか ところ
巣の近くでも、遠くはなれた
ところ
所でも、ハチたちはみんな、うれしそうに
ブンブン と まわ ながら、はな
飛び回りながら、花のみつをさがして
います。はちみつを つく
作っているハチたちも、
ブンブン たの
楽しそうです。

ちい 小さいハチのベルベットは、あま
甘いみつの
ある はな
花をさがすのが しごと
仕事でした。はな
花のみつを
み 見つけると、す も かえ
巣に持ち帰ります。それで、
はちみつが つく
作られるのです。ある ひ
日のこと、
ベルベットが あた と まわ
辺りを飛び回っていると、
チョウの む とお
群れが通りかかりました。

(なんてステキなんでしょう！
いろ うつく はね
色とりどりの美しい羽！わたしも、あんなに
きれいだったらなあ。) と、ベルベットは
おも
思いました。



ベルベツトは、チョウの大きな羽おお はねにある、色とりどりのきれいなもようみを見て、うらやましくなりました。自分の羽じぶん はねを見ると、あまりきれいじゃないなあおもと思いました。「だれもハチになんか、なりたくないわね。」ベルベツトはひとり言ごとを言いいました。

友だちのレオンが、浮かうない顔かおをしているベルベツトにきづいてたずねました。

「どうしたんだい、ベルベツト？」

「何なんでもないわ。」そう答こたえると、ベルベツトは飛とんで行ってしまいました。なぜ自分じぶんがゆううつに感かんじているかなんて、話はなしたくありませんでしたから。

(きっと、おバカさんだおもと思われてしまうわ。)

ベルベツトは、そう思おもったのです。

その日ひの朝あさはずっと、ベルベツトはふくれっ面つらをしていました。ほかのハチたちは、一体いったいベルベツトにななにが起おこったのだらうかと心しんぱい配はいしていました。

レオンが元げんき気づけようとすると、ベルベツトはひとりひとりにしておいてほしいいと言いいました。



あさ 朝の みつあつお集めが 終わると、 ハチたちは
みんな、す 巣にもどって きました。そして、
も かえ 持ち帰った はな 花の みつを、 いっしょうめい す 一生けん命 巣に
た 貯めこんでいます。ところが、 みんなは
うた 歌いながら はたら 働いているのに、 ベルベツトは
ゆううつ そうな 顔で しごと 仕事をしています。
とも 友だちと、 ひどこと くち 一言も 口を きこうと さえ
しませんでした。

おひる 昼になると、 そと 外から こどもたち の
わら 笑い声が きこえて きました。 なに おこって
いるの だろうと、 なん 何びきかの ハチが
でいりくち み 見に行くと、 き 木の下で かぞく 家族が
ピクニックを しようとして いました。
おかあ 母さんは ちうふ 毛布を じめん 地面に ひろ 広げ、 おとう 父さんは
くるま 車から ピクニック用の バスケットを
おろ 下ろしています。 その そばでは、
こども 子供たちが あそ 遊んで いました。



ベルベットは、もっと近くへ行って見てみたいと思おもい、巣すから飛とび立たちました。そして、枝えだに止とまって、子供こどもたちが遊あそぶ様ようす子をながめていました。幸しあわせそうな家か族ぞくが木こかげにすわってピクニックを始はじめると、ベルベットは、その様ようす子こをもっと近ちかくで見みようと、そばに飛とんで行いきました。

すると、男おとこの子こがベルベットを見みつけ、指ゆびをさして言いいました。「ねえ、みんな。ハチが

いるよ！ そばにハチの巣すがあるのかな。」
「木きの上うえの方ほうをごらん。そこにあるよ。」と、お父とうさんが言いいました。

「ハチって、しましまの衣きしょうを着きた、ちっちゃい妖ようせい精せいみたいね。」と、女おんなの子こが言いいました。

「わたしたちが毎まいあさ朝あさトーストにつけて食たべているはちみつは、ハチが作つくってくれてるって、知しっていたかい？」 お父とうさんが言いいました。

「知しってるよ！ はちみつは、ハチがどどの花はなからみつをあつ集あめたかによって、それぞれ味あじがちがうんだよね。」

「その通とおり。神かみさま様さまは、生いき物ものをみんな、それぞれとくべつとくべつ特別こせいで個性こせいのあるものものに造つくってくださったんだよ。」



「わたしも、はちみつが ^{つく}作れたらいいなあ。」
と、女 ^{おんな}の子 ^こが ^い言いました。

「その ^{しごと}仕事を、^{かみさま}神様は ^{まか}八子にお任せに
なったんだよ。おまえには、おまえにしか ^{ない}ない
賜物 ^{たまもの}や ^{さいのう}才能を ^{そな}備えて ^{つく}造ってくださったんだよ。」
と、お父 ^{とう}さんが ^{せつめい}説明してくれました。

お父 ^{とう}さんが ^い言った ^{こと}について、ベルベットは ^{かんが}考えていました。「つまり、^{かみさま}神様は、あるがままの
わたしを ^{あい}愛してくださるっていう ^{こと}なのね。
わたしは、^{かみさま}神様にとって ^{とくべつ}特別なんだわ。 ^{かみさま}神様、
わたしに ^{できる}できる ^{こと}や ^{てつだ}お手伝いをして、ほかの
^{ひと}人たちに ^{よろこ}喜んで ^{かんじや}もらえる ^{こと}を ^{かんじや}感謝します。」

^{みじか}短い ^{いの}お祈りを ^{する}すると、ベルベットは ^{レオン}レオンを
さがしに ^と飛んで ^い行きました。 ^{ふきげん}ふきげんに
ふるまっていた ^{こと}を、あやまりたか ^{った}ったのです。
レオンは、^{とも}友だちが ^{げんき}また ^と元気に ^{まわ}飛び回って
いるの ^みを見て、^{よろこ}喜びました。あるがままの
ベルベットが ^{とくべつ}特別だ ^{こと}という ^{こと}を、 ^{いま}今は
ベルベット ^{じしん}自身が ^わ分かった ^しと ^し知って、
^{うれ}うれしかった ^{こと}のです。

作者不明 絵: Y.M. デザイン: ステファン・ミーラー

出版: マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2014 年、ファミリーインターナショナル
"Velvet, the Buzzing Bee" --Japanese <http://www.mywonderstudio.com>

